

番茶話

泉鏡太郎

青空文庫

蛙かへる

小石川傳通院には、（鳴かぬ蛙）の傳説がある。おなじ
 蛙かへるの不思議は、確か諸國に言傳へらるゝと記憶する。大抵
 此これには昔の名僧の話が伴つて居て、いづれも讀經の折、誦
 念ねんの砌に、其その喧噪さわがしさを憎にくんで、聲こゑを封ふうじたと言いふのである。
 坊ぼうさんは偉えらい。蛙かへるが居ゐても、騒さわがしいぞ、と申まをされて、鳴なかせな
 かつたのである。其處そこへ行くと、今時いまどきの作家さくかは恥はづかしい——皆みなが
 然さうではあるまいが——番町ばんちやうの私わたしの居ゐるあたりでは犬いぬが吠ほえ
 ても蛙かへるは鳴なかない。一度いちどだつて贅ぜいたく澤たくな叱言こゝとなどは言いはないばか

りか、實は聞きたいのである。勿論叱言を言つたつて、蛙の方ではお約束束の（面へ水）だらうけれど、仕事をして居る時の一寸合方にあつても可し、唄に……「池の蛙のひそく話、聞いて寝る夜の……」と言ふ寸法も悪くない。……一體大すぎなのだが、些とも鳴かない。殆どひと聲も聞えないのである。又か、とむかしの名僧のやうに、お叱りさへなかつたら、こゝで番町の七不思議とか稱へて、其の一つに數へたいくらゐである。が、何も珍しがる事はない。高臺だから此の邊には居ないのらしい。——以前、牛込の矢來の奥に居た頃は、彼處等も高臺で、蛙が鳴いても、たまに一つ二つに過ぎないのが、もの足りなくつて、御苦勞千萬、向島むかうじまの三めぐりあたり、小梅こうめ

の 朧おぼろづき 月つきと言ふのを、懷ふところ中なかばかり春寒はるむいく瘦腕やせうでを組くみながら、
 それでもものんきに歩あるいた事こともあつたつけ。……最もう恚かう世よの中なかが
 せつこましく、物價ぶつかが騰貴とうきしたのでは、そんな馬鹿ばかな眞似まねはし
 て居ゐられない。しかし此この時節じせつのあの聲こゑは、私わたしは思おもひ切きれず好すき
 である。處ところで——番ばん町ちやうも下六しもろくの此邊このへんだからと云いつて、石いし
くらげの海月をどが踊だり出したやうな、石燈籠いしどうろうの化ばけたやうな小旦こだんな那なち
 が皆無かいむだと思おもはれない。一いつちやう町ちやうばかり、麴かうぢまち町ちやうの電車でんしや通どほり
ほうの方よへ寄りつぽつた立派かどやしきな角まが邸まがを横よこちやう町ちやうへ曲まがると、其處そこの大溝おほどぶ
 では、くわツ、くわツ、ころくころくと唄うたつて居ゐる。しかし、
つき月つきにしろ、暗夜やみにしろ、唯と、おも入れいで、立たつて聽きくと成なると、
み三みめぐり田圃たんぼをうろついで、狐きつねに魅つままれたと思おもはれるやうな時代じだい

な事ことでは濟すまぬ。誰たれに何なんと怪あやしまれようも知しれないのである。然さらばと言いつて、一ちよつと寸か蛙へるを、承うけたまはります儀ぎでと、一いちく々ちやうない町ちやうない内ないの差配さはいへ斷ことわるのでは、木戸きどせん錢せんを拂はらつて時ほとゝぎす鳥みを見るやうな殺さつぷ風景うけいに成なる。……と言いふ隙ひまに、何なんの、清しみづ水だに谷まで行ゆけばだけれど、要えうするに不精ぶしやうなので、家うちに居ゐながら聞ききたいのが懸値かけねのない處ところである。

里見さとみとん淳とんさんが、まだ本家ほんけ有あり島しまさんに居ゐなすつた、お知ちかづ己きの初はじめの頃ころであつた。何なにかの次手ついでに、此この話はなしをすると、庭にはの池いけにはいくらでも鳴ないて居ゐる。……そんなに好すきなら、ふんづかまへて上あげませう。背戸せどに蓄かつて御覽ごらんなさい、と一いつ向かう色氣いろけのなささうな、腕わんぱく白はくらしいことを言いつて歸かへんなすつた。——翌よくじつ日だつ

け、御免ごめん下くださアい、と耄ほけた聲こゑをして音訪おとづれた人ひとがある。山やまの
うち内うち（里見さとみ氏し本姓ほんせい）から出でましたが、と言いふのを、私わたしが自分じぶんで
とりつ取次とりついで、は、あ、此これだな、白樺しろかばを支那鞄しなかばんと間違まちがへたと
めいぶつふ、名物めいぶつの爺とつさんは、と頷うなづかれたのが、コツプに油あぶらがみ紙みの蓋ふた
 をしたのに、吃驚びつくりしたのやら、呆あきれたのやら、ぎよつとしたの
 やら、途方とほうもねえ、と言いつた面つらをしたのやら、手てを突張つツばつて慌あわて
 たのやら、目めばかりぱちくくして縮すくんだのやら、五六足入びきはひつたの
とぐを届とぐけられた。一ひとこ筆添でそつて居ゐる——（お約やく束そくの此この連れん中ちゆうの、
はやところ早はやい處ところを引ひつ捉とらへてお目めに掛かけます。しかし、どれも面つらつきが前ぜ
んざ座んざらしい。眞打しんうちは追おつて後あとより。——私わたしはうまいなど手てを拍う
 つた。いや、まだコツプを片手かたてにして居ゐる。うまい、と膝ひざを叩たい

た。いや、まだ立つたまゝで居る。いや何にしる感心した。

臺所から縁側に出て仰山に覗き込む細君を「これ

平民の子はそれだから困る……食べものではないよ。」とたし

なめて「何うだい。」と、裸體の音曲師、歌劇の唄ひ子と言ふ

のを振つて見せて、其處で相談をして水盤の座へ……も些と

大業だけれども、まさか缺挿鉢ではない。杜若を一年

植たが、あの紫のおいらんは、素人手の明り取ぐらゐな處では

次の年は咲かうとしない。葉ばかり残して駈落をした、泥のまゝ

の土鉢がある。……其へ移して、簀の子で蓋をした。

葎さんの厚意だし、聲を聞いたら聞分けて、一枚づゝ名でも

つけようと思ふと、日が暮れてもククとも鳴かない。パチヤリと

水みづの音おともさせなければ、其その晩ばんはまた寂寞しんとして風かぜさへ吹ふかない。
 …… 馴染なじみなる雀すずめばかりで夜よが明あけた。金魚きんぎよを買かつた小兒こどものやう
 に、乗のしかゝつて、踞しゃがんで見みると、逃にげたぞ！ 畜生ちくしやう、唯たゞの
 いっぴき

一匹いっぴきも、影かげも形かたちもなかつた。

俗ぞくに、墓ひきは魔まものだと言いふ。嘗かつて十何匹じふなんびき、行ぎやう水ず鹽みに伏ふ

せたのが、一いち夜やの中うちに形かたちを消けしたのは現げんに知しつて居ゐる。

雨あま蛙がへるや青あを蛙がへるが、そんな離はなれ業わざはしなからうと思おもつたが

勿もちろん論ろん、それだけに、蓋ふたも嚴げん重ぢうでなしに隙すきがあればあつた

のであらう。

二に三さん日にち經たつて、孳とんさんに此このはなし話なしをした。丁ちやうど其その日ひ、同おなじ白しらか

樺ばの社しゃ中ちゆうで、御存ごぞんじの名歌集めいかしふ『紅こう玉ぎよく』の著ちよ者しや木下利きのしたり

げん
 玄さんが連立つて見えて居た。——木下さんの方は、孳さん
 より三四年以前からよく知つて居たが——當日連立つて見え
 た。早速小音曲師逃亡の話をする、木下さんの言は
 るには、「大方それは、有島さんの池へ歸つたのでせう。
 蛙は随分遠くからも舊の土へ歸つて來ます。」と言つて話され
 た。嘗て、木下さんの柏木の邸の、矢張り庭の池の蛙を捉へ
 て、水搔の附元を（紅い絹絲）……と言ふので想像する
 と——御容色よしの新夫人のお手傳ひがあつたらしい。……
 その紅い絲で、脚に印をつけた幾疋かを、遠く淀橋の方の田
 の水へ放したが、三日め四日め頃から、氣をつけて、もとの池の
 面を窺ふと、脚に絲を結んだのがちらちら居る。半月ほどの間

には、殆ど放した數だけが、戻つて居て、皆もみぢ袋をはいた娘のやうで可憐だつた、との事であつた。——あとで、何かの書もつで見たのであるが、蛙の名は（かへる）（歸る）の意義ださうである。……此は考證じみて來た。用捨箱、用捨箱としよう。

就て思ふのに、本當か何うかは知らないが、蛙の聲は、隨分大きく、高いやうだけれども、餘り遠くでは響かぬらしい。有島さんの池は、さしわたし五十間までは離れて居まい。それなのに、私の家までは聞えない。——でんこでんこの遊びではないが、一町ほど遠い遠うい——角邸から響かないのは無論である。

ひき 久しい以前だけれど、大塚の火薬庫わき、いまの電車の
 車庫のあたりに住んで居た時、恰も春の末の頃、少々待人が
 あつて、其の遠くから来る俣の音を、廣い植木屋の庭に面した、
 汚い四疊半の肱掛窓に、肱どころか、腰を掛けて、申し上る
 やうにして、来るのを待つて、俣の音に耳を澄ました事がある。
 昨夜も今夜も、夜が更けると、コーと響く聲が遙に聞える、それ
 が俣の音らしい。尤も護謨輪などと言ふ贅澤な時代ではない。
 近づけばカラ〜と輪が鳴るのだつたが、いつまでも、唯コーと
 響く。それが離れも離れた、まつすぐに十四五町遠い、丁ど傳
 通院前あたりと思ふ處に聞えては、波の寄るやうに響いて、
 颯と又汐のひくやうに消えると、空頼みの胸の汐も寂しく泡に

消える時、それを、すだき鳴く蛙の聲と知つて、果敢ない中にも
 可懐さに、不埒な凡夫は、名僧の功力を忘れて、所謂、
 (鳴かぬ蛙)の傳説を思ひうかべもしなかつた。……その記憶
 がある。

それさへ——いま思へば、空吹く風であつたらしい。

又思出す事がある。故人谷活東は、紅葉先生の晩

年の準門葉で、肺病で胸を疼みつゝ、洒々落落々々

とした江戸ツ兒であつた。(かつぎゆく三味線箱や時鳥)

と言ふ句を仲の町で血とともに吐いた。此の男だから、今では逸

事と稱しても可いから一寸素破ぬぐが、柳橋か、何處かの、

お玉とか云ふ藝妓に岡惚をして、金がないから、岡惚だけ

で、夢中に成つて、番傘をまはしながら、雨に濡れて、方

々蛙を聞いて歩行いた。——どの蛙も、コタマ！ オタマ！

と鳴く、と言ふのである。同じ男が、或時、小店で遊ぶと、其

合方が、夜ふけてから、薄暗い行燈の灯で、幾つもく、

あらゆるキルクの香を嗅ぐ。……あらゆると言つて、「此が惠比

壽ビールの、此が麒麟ビールの、札幌の黒ビール、香竄葡萄、

牛久だわよ。甲斐産です。」と、活東の寝た鼻へ押つけて、

だらりと結んだ扱帯の間からも出せば、袂にも、懐中にも、懐

紙の中にも持つて居て、眞に成つて、眞顔で、目を据ゑて嗅ぐ

のが油を舐めるやうで凄かつたと言ふ……友だちは皆知つて居る。

此の話を——或時、淳さんと一所に見えた事のある志賀さん

が聞いて、西洋の小説に、狂氣の如く鉛筆を削る奇人があつて、女のとでは限らない、何でも他人の持つたのを内證で削らないでは我慢が出来ない。魔的に警察に忍び込んで、署長どのの鉛筆の尖を鋭く針のやうに削つて、ニヤリとしたのがある、と言ふ談話をされた。——不束で恐れ入るが、小作蒟蒻本の蠟燭を弄ぶ宿場女郎は、それから思ひ着いたものである。

書齋の額をねだつた時、紅葉先生が、活東子のために（春星池）と題されたのを覚えて居る。……春星池活東、活東は蝌蚪にして、字義（オタマジヤクシ）ださうである。

たまむし
玉蟲

去年きよねんの事ことである。一雨ひとあめに、打水うちみづに、朝夕あさゆふ濡色ぬれいろの戀こひし
 成なる、乾かわいた七しち月ぐわつのはじめであつた。……家内かないが牛うし込ごめ
 で用ようたしがあつて、午ひるち些ちと過すぎに家いへを出でたが、三時さんじ頃ごろ歸かへつて來き
 て、一寸ちよつと目を圓まるくして、それはくゝ氣味きみの悪わるいほど美うつくしいもの
 を見みましたと言いつて、驚おどろいたやうに次つぎの話はなしをした。
 早はやいもので、先せんに彼處あそこに家いへの建たて續つゞいて居ゐた事ことは私わたしたちでも最も
 う忘わすれて居ゐる、中なか六ろく番ばん町ちやうの通とほり市いちヶ谷やみつけ見み附つけまで真まつ直すぐに貫つらぬい
 た廣ひろい坂さかは、昔むかしながらの帶おび坂さかと、三さん年ねん坂さかの間あひだにあつて、確たしか
 まだ極きまつた名めい稱しやうがないかと思おもふ。……新しん坂さかとか、見み附つけの坂さか

とか、勝手に稱へて間に合はせるが、大きな新しい坂である。此
 の坂の上から、遙に小石川の高臺の傳通院あたりから、金
 剛寺坂上、目白へ掛けてまだ餘り手の入らない樹木の鬱然
 とした底に江戸川の水氣を帯びて薄く粧つたのが眺められる。景
 色は、四季共に爽かな且つ奥床しい風情である。雪景色は特
 に可い。紫の霞、青い霧、もみぢも、花も、月もと數へたい。故
 々言ふまでもないが、坂の上の一方は二七の通りで、一方
 は廣い町を四谷見附の火の見へ抜ける。——角の青木堂を左に
 見て、土の眞白に乾いた橘、鮎の前を……薄い橙色の涼
 傘——束ね髪のかみさんには似合はないが、暑いから何うも仕方
 がない——涼傘で薄雲の、しかし雲のない陽を遮つて、いま見

つけさかお
附の坂を下りかけると、眞日まひなか中で、丁どちやう人ひとどほり通とどが途絶とだえた。：

ひとりひとりふたりふたりはあつたらうが、場所ばしょが廣ひろいし、殆どほとん影かげもないから

ひっそりひっそり寂み寞もして居た。柄えを持つた手許てもとをスツと潜くぐつて、目めの前まへへ、恐おそ

はなはなならなららく鼻はなと並ならぶくらゐに衝つと鮮あざかな色しき彩さいを見みせた蟲むしがある。深ふかく

ここまみどりまみどりつばさつばさが晃きら々々と光ひかつて、緋色ひいろの線せんでちらちらと縫ぬつて、

濃こい眞緑まみどりの翼つばさが晃きら々々と光ひかつて、緋色ひいろの線せんでちらちらと縫ぬつて、

裾すそが金色こんじきに輝かがきつゝ、目めと目めを見合みあふばかりに宙ちうに立たつた。思おも

はず、「あら、あら、あら。」と十八九こゑの聲こゑを立てたさうである。

途端とたんに「綺麗きれいだわ」「綺麗きれいだわ」と言いふ幼いとけない聲こゑを揃そろへて、女をんなの兒こ

が三人さんにんほど、ばらばらと駈かけ寄よつた。「小母をばさん頂ちやう戴だいな」

「其その蟲むし頂ちやう戴だいな」と聞きくうちに、蟲むしは、美うつくしい羽はねも擴ひろげず、

静しづかに、鷹揚おうやうに、そして輕かるく縦たてに姿すがたを捌さばいて、水馬みづすまが細さいな

波なみを駈かける如ごとく、ツツツと涼傘ひがさを、上うへへ梭投ひなげに衝つくと思おもふと、

パツと外そとへそれとて飛とぶ。小兒こどもたちと一いつ所に、あらくくと、また

言いふ隙ひまに、電柱でんちゆうを空くうに傳つたつて、斜なめあが上たかりの高やい屋根ねへ、きら

くきらくくと青あをく光ひかつて輝かがきつゝ、それより日ひの光ひかりに眩まぶしく消き

えて、忽たちまたち唯一いつてん天はるを、遙はるかに仰あふいだと言いふのである。

おほ 大きいさは一寸二三分いっすんにさんぶ、小ちひさな蟬せみぐらゐあつた、と言いふ。……し

かし其その綺麗きれさは、何どうも思おもふやうに言いあらはせないらしく、じれ

つたさうに、家内かないは些ちと逆上のほせて居あた。但たゞし蒼あをく成なつたのでは厄や

介つかいだ。私わたしは聞きくとともに、直下すぐしたの三番町さんばんちやうと、見附みつけの土手どて

には松並木まつなみきがある……大方おほかた玉蟲たまむしであらう、と信しんじながら、

其そのの美うつくしい蟲むしは、顔かほに、其そのの玉蟲たまむし色いろ笹色ささいろに、一寸ちよつと、口紅くちべに

をさして居たらしく思つて、悚然とした。

すぐ翌日であつた。が此は最う些と時間が遅い。女中が晩

の買出しに出掛けたのだから四時頃で——しかし眞夏の事ゆゑ、

片蔭が出来たばかり、日盛りと言つても可い。女中の方は、

前通りの八百屋へ行くのだつたが、下六番町から、通へ出

る薬屋の前で、ふと、左斜の通の向側を見ると、其處

へ來掛つた羅の盛装した若い奥さんの、水浅葱に白を重ねた

涼しい涼傘をさしたのが、すらくと捌く棲を、縫留められたや

うに、ハタと立留まつたと思ふと、うしろへ、よろ／＼と退りな

がら、翳した涼傘の裡で、「あら／＼あらあら。」と言つた。す

ぐ前の、鉢ものの草花屋、綿屋、續いて下駄屋の前から、小兒

が四五人ばら／＼と寄つて取巻いた時、袖へ落すやうに涼傘をは
 づして、「綺麗だわ、綺麗だわ、綺麗だわ、綺麗だわ。」と魅せられた
 やうに言ひつゝ、草履をつま立つやうにして、大空を高く、目
 を据ゑて仰いだのである。通りがかりのものは多勢あつた。女
 中も、間は離れたが、皆一齊に立留つて、陽を仰いだ——と
 言ふのである。私は聞いて、其の夫人が、若いうつくしい人だけ
 に、何となく凄かつた。

赤蜻蛉

一 昨年いっさくねんの秋九月あきくぐわつ——私はわたし不心得ふこころえで、日記にっきと言いふものを認した

めた事ことがないので幾日いくかだか日は覺おぼえて居ゐないが——彼岸前ひがんまへだつただけは確たしかだから、十五日じふごにちから二十日頃はつかごろまでの事ことである。蒸むしあ暑つかつたり、涼すずし過ぎすたり、不順ふじゆんな陽氣やうきが、昨日きのふも今日けふもじとくと降りふくらす霖雨ながあめに、時々とき／＼野分のわきがどつと添そつて、あらしのやうな夜よるなど續つづいたのが、急きふに朗はかに晴はれ渡わたつた朝あさであつた。自慢じまんにも成ならぬが叱しかりて人もない。……張合はりあひのない例れいの寢坊ねぼうが朝飯あさめしを濟すましたあとだから、午前ごぜん十時半頃じふじはんごろだと思おもふ……どんくと色氣いろけなく二階にかいへ上あがつて、やあ、いゝお天氣てんきだ、難有ありがたい、と御禮おれいを言いひたいほどの心持こころもちで、掃除さうぢの濟すんだ冷ひやりとした、
 東向ひがしむきの縁側えんがはへ出でると、向むかう邸やしきの櫻さくらの葉はが玉たまを洗あらつたやうに見みえて、早はやほんのりと薄紅うすべにがさして居ゐる。狭せまい町まちに目めまぐろ

しい電線も、銀の絲を曳いたやうで、樋竹に掛けた蜘蛛の巢
 も、今朝ばかりは優しく見えて、青い蜘蛛も綺麗らしい。空は朝
 顔の瑠璃色であつた。欄干の前を、赤蜻蛉が飛んで居る。
 私は大すきだ。色も可し、形も可し……と云ふうちにも、此の頃
 の氣候が何とも言へないのであらう。しかし珍しい。……極暑
 の砌、見ても咽喉の乾きさうな鹽辛蜻蛉が炎天の屋根瓦に
 こびりついたのさへ、觸ると熱い窓の敷居に頬杖して視めるほ
 ど、庭のない家には、どの蜻蛉も訪れる事が少いの——よく來
 たな、と思ふうちに、目の前をスツと飛んで行く。行くと、又一
 つ飛んで居る。飛んで居るのが向うへ行くと、すぐ來て、又欄
 干の前を飛んで居る。……飛ぶと云ふより、スツくと軽く柔

かに浮いて行く。

忽ち心着くと、同じ處ばかりではない。縁側から、町の幅

一杯に、青い紗に、眞紅、赤、薄樺の緋を透かしたやうに、

一面に飛んで、飛びつゝ、すら〜と伸して行く。……前へ

、行くのは、北西の市ヶ谷の方で、あとから〜、来るのは、

東南の麴町の大通の方からである。數が知れない。

道は濡地の乾くのが、秋の陽炎のやうに薄白く揺れつゝ、

ほんのり立つ。低く行くのは、其の影をうけて色が濃い。上に飛

ぶのは、陽の光に色が淡い。下行く群は、眞綿の松葉をちら〜

と引き、上を行く群は、白銀の針をきら〜と翻す……際限も

なく、それが通る。珊瑚が散つて、不知火を澄切つた水に鏤めた

やうである。

わたしは身を翻して、裏窓の障子を開けた。こゝで、一寸恥を言はねば理の聞えない迷信がある。私は表一階の空を眺めて、その足で直に裏窓を覗くのを不斷から憚るのである。何故と言ふに、それを行つた日に限つて、不思議に雷が鳴るからである。勿論、何も不思議はない。空模様が怪しくつて、何うもごろくくと來さうだと思ふと、可恐いもの見たさで、悪いと知つた一方は日光、一方は甲州、兩方を、一時に覗かずに居られないからで。——鄰村で空白を磨るほどの音がすればしたで、慌しく起つて、兩方の空を窺はないでは居られない。従つて然う云ふ空合の時には雷鳴があるのだから、

いつもはかつぐのに、其その時は、そんな事ことを言いつて居ゐる隙ひまはなかつた。

窓まどを開あけると、こゝにも飛とぶ。下屋げやの屋根瓦やねがはらの少すこし上うへを、す

れれくくに、晃きら々々、ちらちらくくと飛とんで行ゆく。しかし、表おもからは、

木戸きどをひと一つ丁字形ちやうじがたに入組いりくんだ細ほそい露地ろぢで、家いへと家いへと、屋根やねと屋

根ねと附くつついて居ゐる處ところだから、珊瑚さんごの流ながれは、壁かべ、廂ひさしにしがらんで、

堰せかるると見みえて、表おも欄もてらんかん干かんから見みたのと較くらべては、やまばら

あつた。此この裏うらは、すぐ四谷見附よつやみつけの火ひの見櫓みぐらを見透みとほすのだが、其そ

の遠とほく廣ひろいあたりは、日ひが眩まぶしいのと、樹じゆ木もくに薄霧うすぎりが掛かつたの

に紛まぎれて、凡およそ、どのくらゐまで飛とぶか、伸のすか、そのほどは計はか

られない。が、目めの届とくほどは、何處どこまでも、無數むすうに飛とぶ。

ところ、ひさし
 處で、廂だの、屋根だのの蔭で、近い處は、表よりは、色も羽
 はつきり
 も判然とよく分る。上は大屋根の廂ぐらゐで、下は、然れば丁
 ろぢうら
 ど露地裏の共同水道の處に、よその女房さんが踞んで洗濯
 をして居たが、立つと其の頭ぐらゐ、と思ふ處を、スツくと浮
 いて通る。
 わたしした
 私は下へ下りた。——家内は髪を結ひに出掛けて居る。女中
 ひさ
 は久しぶりのお天氣で湯殿口に洗濯をする。……其處で、昨
 のふほ
 日穿いた泥だらけの高足駄を高々と穿いて、此の透通る
 あきびより
 やうな秋日和には宛然つままれたやうな形で、カランくと戸
 もてで
 外へ出た。が、出た咄嗟には幻が消えたやうで一疋も見えぬ。熟
 ひとみさだ
 と瞳を定めると、其處に此處に、それ彼處に、其の數の夥しさ、

下に立したつたものは、赤蜻蛉あかとんぼの隧トンネル道みちを潜くぐるのである。往來ゆききはあ
 るが、誰だれも氣きがつかないらしい。一ひとつ二ふたつは却かへつてこぼれて目めに
 着つかう。月夜つきよの星ほしは數かずへられない。恁かくまでの赤蜻蛉あかとんぼの大おほいなる
 群むれが思おもひ立たつた場所ばしよから志こころざす處ころうへ移うつらうとするのである。おのづ
 から智慧ちゑも力ちからも備そなはつて、陽ひの面おもてに、隱おんぎ形やう陰體いんたいの魔法まほうを使つか
 つて、人目ひとめにかくれ忍しのびつゝ、何處いづこへか通とほつて行ゆくかとも想おもはれ
 た。

先刻さつき、もしも、二階にかいの欄干らんかんで、思おもひがけず目めに着ついた唯一たゞいつび

匹きがないとすると、私わたしは此こゝの幾いくせん千萬まんとも數すうの知しれない赤蜻蛉あかとんぼ

のすべてを、全體ぜんたいを、まるで知しらないで了しまつたであらう。後あと

で、近所きんじよでも、誰たれ一人ひとり此こゝの素すばらしい群むれの風説うはさをするものな

かつたのを思ふと、渠等は、あらゆる人の目から、不可思議な角
 度くどに外それて、巧たくみに逸いつし去さつたのであらうも知しれぬ。

さて足駄あしだを引摺ひきずつて、つい、四角よっかどへ出でて見みると、南寄みなみよりの
 方ほうの空そらに濃こい集團しふだんが控ひかへて、近ちかづくほど幅はを擴ひろげて、一いち面めんに
 群むらりつゝ、北きたの方かたへ伸のすのである。が、厚あつさは雜ざつと堀へいの上うへから二
 階家かいやの大屋根おほやねの空そらと見みて、幅はの廣ひろさは何どのくらゐまで漲みなぎつて居ゐ
 か、殆ほとんど見當けんたうが附つかない、と言いふうちにも、幾いくせん干かんともなく、
 急いそぎもせず、後おくれもせず、遮さへぎるものを避さけながら、一ひとつ一ひとつがお
 なじやうに、二に三さん寸すんづゝ、縦横じうわうに間あひだをおいて、悠然いうぜんとして
 流ながれて通とほる。櫻さくらの枝えだにも、電線でんせんにも、一ちよつと寸と留とどまるのもなけれ
 ば、横よこにそれようとするものもない。

ひきかへ引返して、木戸口から露地を覗くと、羽目と羽目との間に成る。こゝには一疋も飛んで居ない。向うの水道端に、いまの女房さんが洗濯をして居る、其の上は青空で、屋根が遮らないから、スツ／＼晃々と矢ツ張り通るのである。「おかみさん。」わたしよ私は呼んだ。「御覽なさい大層な蜻蛉です。」「へゝい。」とおほ大きな返事をする、濡手を流して泳ぐやうに反つて空を視た。顔中をのこらず鼻にして、眩しさにしかめて、「今朝ツから飛んで居ますわ。」と言つた。別に珍しくもなささうに唯つい通りに、其處等に居る、二三疋だと思ふのであらう。時に、もうやがて正午に成る。

小一時間経つて、家内が髪結さんから歸つて來た。意氣込

はなし
 で話をする——道理こそ……三光社の境内は大變な赤
 蜻蛉かとんぼで、雨の水溜あめ みづたまりのある處へ、飛びながらすいと下り
 るのが一杯いっばいで、上を乗越うへ のりこしさうで成らなかつた。それを子供こどもた
 ちが目筈めざるで伏せるのが、「摘草つみくさをしたくらゐ筈ざるに澤山たくさん。」と
 言ふのである。三光社さんくわうしゃの境内けいだいは、此の邊こへんで一ちよつ寸子供こどもの公
 園こうえんに成つて居る。私わたしの家うちからさしわたし一町いちやうばかりはある。
 此の様子やうすでは、其處そこまで一面いちめんの赤蜻蛉あかとんぼだ。何處どこを志こゝろざして行く
 のであらう。餘りあまの事ことに、また一度外いちどそとへ出た。一時いちじを過ぎた。爾そ
 のときときは最もう一つも見えなかつた。そして摘草つみくさほど子供こどもにとられ
 たと言ふのを、何だか壇なんだんの浦うらのつまりくで、平家へいけの公達きんたちが組
 伏みふせられ刺殺さしころされるのを聞きくやうで可哀あはれであつた。

とに角、此の赤蜻蛉の光景は、何にたとへやうもなかつた。が、同じ年十一月のはじめ、鹽原へ行つて、畑下戸の溪流瀧の下の淵かけて、流の廣い溪河を、織るが如く敷くが如く、もみぢの、盡きず、絶えず、流るゝのを見た時と、——鹽の湯の、斷崖の上の欄干に凭れて憩つた折から、夕風颯として、千仞の谷底から、瀧を空状に、もみぢ葉を吹上げたのが周圍の林の木の葉を誘つて、満山の紅の、且つ大紅玉の夕陽に映じて、かげとひなたに濃く薄く、降りかゝつたのを見た時に、前日の赤蜻蛉の群の風情を思つたのである。

肝心の事を言ひおくれた。——其の日の赤蜻蛉は、残らず、一つも残らず、皆一つづつ、一つがひ、松葉につないで、天人

の乗る八挺の銀の櫂の筏のやうにして飛行した。

何と……同じ事を昨年も見た。……篤志の御方は、一寸お

日記を御覽を願ふ。秋の半かけて矢張り鬱々陰々として霖

雨があつた。三日とは違ふまい。——九月の二十日前後に、

からりと爽かにほの暖かに晴上つた朝、同じ方角から同じ方

角へ、紅舷銀翼の小さな船を操りつゝ、碧瑠璃の空をきら

くきらくくと幾千萬艘。——家内が此の時も四谷へ髪を結

ひに行つて居た。女中が洗濯をして居た。おなじ事である。

其の日は歸つて来て、見附の公設市場の上かけて、お濠の上

は紀の國坂へ一面の赤蜻蛉だと言つた。惜い哉。すぐにも

あとを訪ねないで……晩方散歩に出て見た時は、見附にも、お

濠^{ほり}にも、たゞ霧^{きり}の立^たつ水^{みづ}の上^{うへ}に、それかとも思^{おも}ふ影^{かげ}が、唯^{たゞ}二^{ふた}つ、
 三^みつ。散^ちり來^くる木^この葉^はの、しばらくたゞずまふに似^にたのみであつ
 た。

大正十一年五月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「番茶話《ばんちやばなし》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

番茶話

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>